

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第11回/アール・デコ博覧会(その2)

Residence of Prince Asaka 1933—



図1

博覧会は1925年4月28日午後3時から開会式が行われ、いよいよ幕が開かれました。開会式の会場となったグラン・パレのホールには8千人以上もの人が詰めかけたと言われています(図1)。メイン会場として使われたグラン・パレの広々としたホールを人々が埋め尽くす光景は、博覧会の偉大な成功を予感させるものでした。

博覧会には21の国が参加しました。日本を始めとする17カ国、イギリス、ベルギー、イタリア、デンマーク、スイス、スウェーデン、スペイン、ギリシア、モナコ、ポーランド、ソヴィエト、オーストリア、オランダ、チェコスロバキア、トルコ、ユーゴスラビアは独自のパヴィリオンを建て、中国、ルクセンブルク、ラトビア、フィンランドの4カ国は出品のみの参加でした。第一次世界大戦直後であったため、敵国であったドイツは招待されませんでした。革命直後のソヴィエトを含め、ヨーロッパの主要な国々はほぼ参加しています。アメリカ合衆国は不参加でした*1。

日本も1923(大正12)年に関東大震災があったため、経済的には多難な時期でしたが、いち早く



図2



図3

参加を表明しました。19世紀の博覧会で、日本の美術工芸品がその名声を大いに高めた経験から、政府はアール・デコ博にも輸出の増進と国内産業の育成に大きな効果を上げることを期待したのでしょう。

博覧会には37もの部門がありました。その中には建築と家具、建築に使われる装飾品、そしてファッションと装身具の部門があり、それぞれ石、木、金属、やきもの、ガラスといった素材ごとに分類されました。この他に玩具やスポーツ用品、技術教育関連の展示があり、さらに時代を象徴するポスター、ショーウィンドー、外灯といった都市空間を彩るもの、あるいは舞台美術や写真、映画も含まれていました。通常の展示に加え、あたかも映画のセットのように、洗練された新しい工芸品を室内の中に構成した魅力的な展示を見ることも出来ました。

博覧会の名称に「アンデュストリエール(Industrieles)」とありますが*2、従来の博覧会で人々を驚かせてきた巨大な動力装置や大砲、自動車などの「工業技術」を出品物に見ることはほとんど出来ません。この博覧会における「アンデュストリエール」とは、手工芸を意味する「アール(Art)」と対比する意味で、機械技術を使った「産業美術」と理解すれば良いでしょう。



図4

図1. 開会式に賑わうグラン・パレのホール

図2. 山田七五郎と宮本岩吉の設計による日本館外観

図3. ラバンが内装を担当した国立セーヴル陶磁器製作所のパヴィリオン(写真左側の建物)

図4. 朝香宮邸を設計した宮内省内匠寮(たくみりょう)技師、権藤要吉の渡欧日記に貼付された博覧会の入場券

*1. 当時のアメリカには、アール・デコ博への出品に見合うものがなかった、というのがその理由とされています。

*2. アール・デコ博の正式名称は「現代装飾美術・産業美術国際博覧会(Exposition Internationale Arts Décoratifs et Industriels Modernes)」です。

会場はグラン・パレとセーヌ河畔の両側を横軸に、アレクサンドル3世橋からまっすぐアンヴァリッド(廃兵院)の前までを縦軸にして、十字型に広がりました。パリ市が提供した会場の総面積は実に28ヘクタールに及び、出入口はシャンゼリゼ大通りから入るグラン・パレ脇の「名誉の門」など12カ所に置かれました。

遠景にアンヴァリッドのドームを望むセーヌ左岸の会場は、フランスの各パヴィリオンが緑地との調和を図りながら整然と並びました。橋を渡ると左右にボン・マルシェとプランタンという有名百貨店のパヴィリオンがあり、そのいかにも斬新な外観は、ヨーロッパで繰り返し用いられてきた歴史様式から脱却し、完全な新しい着想による創造を目指した博覧会のねらいに合致するものでした。左岸のユニークなものは、服飾デザイナー、ポール・ポワレのそれで、ポワレはセーヌ川に浮かべた三艘の船をパヴィリオンとしました。

グラン・パレ側のセーヌ右岸には、パリ市などフランスのパヴィリオンに加え、各国パヴィリオンが軒を並べました。日本館が建てられたのも右岸です(図2)。場所はアレクサンドル3世橋のすぐ脇でしたから、かなり配慮された場所であったと言えるでしょう。右岸のパヴィリオンの中には、機能的なモダニズムのデザインとして異彩を放ったメリニコフ設計によるソヴィエト館、ル・コルビュジエ設計によるエスプリ・ヌーヴォー館もありました。滞欧中であつた朝香宮ご夫妻は7月9日に会場を訪問されています。ここで博覧会の配置図をあらためて見てください。セーヌ左岸の会場中央には、国



アール・デコ博覧会配置図



図6

図5. 博覧会のシンボルともいえるラリックの噴水塔

図6. ラバンが内装を手掛けたフランス大使館の華やかな大客室は、博覧会のハイライトのひとつ

立セーヴル陶磁器製作所(図3)、一番奥のアンヴァリッドの前に技能館があり、その二つの内装デザインを手掛けたのがアンリ・ラバンでした。ルネ・ラリックはその技能館の前に噴水塔と自らのパヴィリオン(図5)を出展しています。ご夫妻がこの華やかな会場の中でも、後に宮邸を依頼することになる二人の活躍に、とりわけ目を見張られたであろうことは想像に難くありません。

(次号に続く/関)◆



図5